

ラスキン 『ムネラ・プルウエリス』 (一八七二年)

序

本書は、イギリスで出版された政治経済学の基本法則を、いわば初めてきちんと正しく批判したものである。

たしかに、通説に逆らいながらそれなりに的を射た論文というのも、これまで数多く出された。しかし、世の中でもっとも高度な営みの産物、ふつうの言葉でいえば「芸術」だが、その価値がわからない人間には、この問題を徹底的に検証することは不可能であった。一方、芸術に通じている人間はといえば、私の知るかぎり、誰ひとり政治経済学の問題には取り組まず、近づこうもしなかった。

したがって、本書の論考が雑誌に発表されたとき(一八六三年)までは、富を生み出す主要な条件が語られることなどなかったし、富の本質そのものもけつして明らかにはされなかった。J・S・ミルによれば、「富とは何かについて、ひとびとは誰でも日常の用を足すには困らない程度にちゃんと理解している」。ミルは『経済学原理』の冒頭でそう述べて、後は心置きなく論を進めた。それならば、火や水についてなら、誰でも「日常の用を足すには困らない程度にちゃんと理解している」のだから、化学者はもはや火や水の性質を確かめることもないまま、化学の法則の探求に進んでもよいのだろうか。

一見きわめてもつともらしいミルの言葉さえ、じつは正しいものではなかった。ごくふつうに日常の用を足しながら、富が「何を意味するものなのか」十分に正しく理解している人間は、一人にひとりもないのである。しばしば人が軽く口にする「本当の富」となると、その意味がわかる人間はさらに少ない。まさしくその意味を明らかにするのが経済学者のしごとはずである。

なるほど、豪華な食事とか素敵な服装の楽しさなら、われわれは(経験によって、あるいは想像力によって)知っている。ミルも、そういうものとか、それを手に入れる手段のみを富と考えたのであれば、そういう富なら完璧に科学的に正確に定義するのは簡単であったろう。

しかし、ミルはそこまで底浅ではなかった。富には、そうしたものの以外の何かを保有していること、あるいは手に入れる力を持つことも含まれる。それをミルは知っていた。ただ、彼は自分の生活を研究したので、本質的価値の原理にたどりつく手がかりを持ちえず、一般大衆の俗見を自分の科学の基礎とせざるをえなかった。そして、もちろん一般大衆は彼ら自身の考え方に基礎づけられたミルの「科学的な」観念を喜んで受け入れた。

私はミルと逆である。私は、自分の日常のしごとのおかげで探求のフィールドがより大きく広がったばかりでなく、その探求の途中でありがたくも厳しい教えを授かることができた。これは私独自のメリットである。

たとえば、一八五一年の冬のこと。私はヴェネツィア建築を研究中で、その資料を集めていた。サン・ロッコ聖堂の天井にあったルネサンス期の画家ティントレットの絵三枚が、「一八四九年」オーストリア軍の砲撃でできた三つの穴のふちに、壁の地下やしっくいとともポロポロの状態でぶらさがっているのを見た。

ヴェネツィアの町自体には、その冬、この破損を修復する金銭的な余裕はなさそうであった。天井から垂れてくる雨水を受けるために、聖堂の上階の床にはバケツがいくつも置かれていた。雨水は天井の穴から直接落ちてくるばかりでなく、天井全体に染みわたり、ティントレットの

他のたくさん絵からも、そのキャンバスをとおりぬけて落ちてくるのである。

これは先ほど述べたとおり、私に直接、厳しい教えを授けるものとなった。ヴェネツィアにあるティントレットの絵画は、人間の営みによる最高の産出物の現品であり、まさしくヨーロッパの富を象徴する最高の貴重品であることを、私は知っていたからである（ただし、そのことは最近「一八七一年」オックスフォードでの講義で述べるまで、一度もあえて公言しなかった）。かつては天井を飾った名画の三枚が、いまはこうやって濡れそぼち、ボロボロになってぶらさがっている。ところが同じころ、パリのリポリ通りの画廊では、着実に増大しつつある大衆の「需要」に応えるために、最近の華やかなダンスを極彩色で精緻に描いたリトグラフ（石版画）の「供給」もまた着実な増大を見せ始めていた。なかでも売れ筋は「カンカン」ダンスで、それがずっとトップである。

石を彫ってそういうリトグラフをつくるために費やされた労働の量は、ティントレットが同じサイズの絵を描くのには通常費やした労働の量を、はるかに上回る。

そこで、労働を価値の源泉と見なすならば、きわめて念入りに彫られた石版は、ティントレットの絵よりも価値があることになる。また、リトグラフは大量に生産が可能であり、しかもコンスタントに「需要」があるので、大量に生産してもすぐに売れるし、すぐに引きさらされる。したがって、パリ市は（無数のすぐれた油絵や大理石彫刻をもちだすまでもなく）こういうリトグラフの原版をたくさん保有していることで、あのヴェネツィア市よりも裕福ということになる。なにしろ、その地が保有する絵画は、南風と塩混じりの雨にさらされてキャンバスにカビが生え、ボロボロになっているからである。ゆえに、パリ市はヴェネツィアをはるかにしのぐほど裕福であると、当然のように考えられた。これまで正しいとされ、正しいと信じられてきた政治経済学の原理にもとづくならば、その考えはまちがいでなかった。

だからこそ、パリはそうした立派なお宝を雨風から守るために、（大きな出費になるのにもかかわらず）高級画廊がならぶアーケードや、贅沢な収納部屋つきのアパートも数多くそなえてきたのである。

しかし、あいにくながら、パリはそういうものを保有することによって前より豊かになったわけではなかった。真実のところをいうならば、そんな極彩色のリトグラフはけっして富などではなく、むしろ富とは逆のしるものにすぎなかった。

パリは、そうしたものの生産に費やした労働の量の、まさにその分だけ絶対的「貧困」より上に昇ったのではなく、それより下に沈んだのである。もたらされたのは、たんに偽の「豊かさ」であるにとどまらない。それは真の「負債」であり、パリはけっさよく「昨一八七一年のパリ・コミュニケーション」それを清算せざるをえなかった。リポリ通りのいまのありさまをご覧になればおわかりのとおりである。

一方、ヴェネツィアの建物の天井の、あの色あせた絵こそ、はかり知れない絶対的な富であった。それらは、灰に埋もれた都市に放置されたままの宝物と同様、その持ち主にとって無用のものでありながら、じつはそのなかに真実の、そして永遠の富という性質を秘めていた。

つまり、ヴェネツィアが保有するのは宝の残骸にすぎないにもかかわらず、それでもヴェネツィアは豊かな都市なのである。ただ残念ながら、ヴェネツィア人は、雨漏りする屋根に瓦を貼るといごごくふつうの用を足すことさえしないほど、「富とは何か」についての理解が《欠如》していた。

絵画にかんして、並みの経済学者はこう言うであろう。経済学が問題にするのは、絵画のクオリティではなく、その交換価値のみである、と。そして、ティントレットの絵は、はたして

1 リトグラフの原版から複製される絵と同じく十六ペンスの価値があるのかどうか。まさに、もっぱらそれだけを考えるのが自分のしごとなのだと言うであらう。

5 しかし、絵画でなく馬の話になると、経済学者もそんな答え方ですますことはできません。立派な種馬をもつ者は、やせこけて喘息もちの馬をもつ者より絶対的に豊かであることは、どれほど愚鈍な経済学者にもわかる話だろうし、うなずける話だろう。

10 そして、いづれにせよ、馬に支払われた金額の高低によって馬の優劣が決まるといってもいいことはない。この学者が看板だけの経済学から何も学んでいなくても、それは本能的に正しいと直感するだろう。つまり、良い馬は、それがたまたま数ギニーで買えたからといって、価値が下がったわけではないのである。やせ馬の持ち主が、その馬に百ギニーも払ったからといって、少しも豊かになっただけではない。

15 経済学は絵画のクオリティを考察の対象にしない、などと言う経済学者は、たんに自分は絵画の本質的な良し悪しがさっぱりわからないと告白しているにすぎない。また、自分は絵画のような品々にかんしては富の法則を研究する力もないと告白しているにすぎない。まさにこれが事実である。

20 しかも、絵画で本当の価値を見定めることができなければ、当然のごとく、絵が入ったガラスや陶器、模様をついた織物その他、真の巧みの技が必要なその国の工芸品についても、本当の価値があるのかわないのか見定められるはずがない。

25 いや、荷役用の家畜についてなら本当の価値のほどがわかると思っているかもしれないが、そういう馬やロバについてさえ、国民経済学の一般原理を示してみせようと努力した経済学者はひとりもいなかった。

30 けつきよく、《近代の政治経済学者は例外なく、本当の価値の本質がまったく理解できなかった》のである。

35 そこで本書の特色は、第一に、「本当の価値」および「本当の無価値」の定義をまず最初におこなって、そしてそれをその後にくすすべての論考の基礎としていることにある。無価値のもの、ネガティブなパワーは、これまで誰からも完全に無視されてきたし、本当の価値のポジティブなパワーも、まったく定かにされないままであった。

40 さて、もうひとつ、近代の経済学者は本当の価値というものがわからないので、ものについては世間での評価をそのまま受け入れて、それを自分の学問の唯一の基礎にしている。そしてその上で経済学者は、世間的な需要と供給の関係をつかさどる恒久の法則を自分は見定めた、と信じ込んでしまった。あるいは少なくとも、需要と供給は神の手によってバランスするものであり、人間にはその均衡点を予測する力がないことはすでに証明済みだ、と思いついてしまった。

45 私は最近たまたま、この需要と供給の法則の理論が実践的にするどく問われる場面に遭遇した。先に、私が本当の価値についての理論を知ったのは、すさまじい包囲攻撃にあった後のヴェネツィアに行ったおかげであるが、今度もやはりさまざまに包囲攻撃された別の都市での見聞のおかげで、需要と供給の法則の理論が認識できた。奇妙な偶然の一致である。

50 私は「一八七一年」パリが市街戦に敗れた直後に、その地へ赴いた。パリへの食糧補給を議論する委員会がロンドン市長の主宰で開かれ、私はその委員のひとりになったのである。

55 その委員会では、需要と供給の法則がきわめて重大な問題となった。すなわち、その法則はどういうときに働き始めるのか、そして、法則が働けば正確にはどうなるのか、それがまさにパリ市民の生死にかかわる大問題だったのだ。

60 当時は、需要がじつさい切迫したものとしてそこにあった。数時間のうちに餓死してしまう

であろう数百万のひとびとの、何でもいいから食べ物欲しいという切迫した需要であった。

ところが委員会の議論においては、例の聖なる需要供給の法則がこの地でもギリギリの瀬戸際でひとりで働くだろう、という話になったのである。ただ運搬用の荷車や馬が不足しているため、何分間かの遅れがでるかもしれない。

そこでわれわれは、あえて聖なる法則に干渉し、急いで荷車と馬を調達すべく乗り出した。幸いにもそれで間に合ったわけだが、時間的にはやはりギリギリであった。

この委員会ではさらにつきぎのこともわかった。すなわち、聖なる需要供給の法則は、パリの貧民にとっての必需品一ペニー分が十二ペンスに、つまり、十二倍もの値段になることから作動し始める。そして、彼らが必要としないものは十二ペンス分が一ペニーになって、この法則は作動を終える。

それがわかった上で委員会はこう結論した。いまのような特別の場合、このちよつとした難問の解決のため、例のありがたい需要供給の原理に「機械仕掛けの神として」「登場してもらおう」までもない。そこで、われわれはこのときばかりは神にたよらず、人間の主体的な取り組みによって解決しようとしたのである。困窮しているパリの民衆のために、彼らが必要とするものを、彼らが必要とするときに提供しようとする組んだ。

じつさい、われわれはわれわれに託された金額で食糧補給に成功した。そのことは忘れられないだろう。

しかし、需要供給の「法則」なるものは、あの緊急事態において虚妄だと感じられたわけだが、それほど緊急の場合でなくても、じつは虚妄なのである。つまり、いつでもどこでも虚妄なのである。

じつさい、この法則は存在そのものが空想の産物なので、一般の経済学者たちのあいだでもその説明はまちまちだ。ある者によれば、それは需要と供給の関係によつてものの値段は調整されることを意味するにすぎない。この説明は部分的に正しい。また、ある者によれば、この法則は、需要と供給の関係に人間が手出しするのは賢明なことではないことを意味する。この説明は、上述の例でわかるように、正しくない。というか、そもそも真実とは正反対である。なぜなら、国であろうと家庭であろうと、賢明な経済というのは、需要と供給のあいだにある一定の関係をきちんと保つことにあるのであつて、けつしてそれを自由に、つまり（そのまま）自然に放任しておくことではないからである。

賃金は競争によつて決まる、というのもまた、通俗的な政治経済学が掲げる「法則」のひとつだ。

しかし、私は自分の家の召使いには、彼らが楽に暮らすのに必要な額の賃金を渡しているつもりである。その額は、けつして競争によつて決まったものではない。彼らの暮らしや働きぶりにたいする私の気持ちと、そして彼ら自身の気持ちがあわさつて額は決まる。かりに私が明日無一文になったとしても、彼らの何人かはきつと私のために無報酬で働き続けてくれるだろう。

通俗的な政治経済学の「法則」なるものは、現実の場面でも想像上の場面でも、絶対的に怪しいものなのだ。一方、万有引力の法則は怪しいと思えないし、気温が三十二度を超える暑さのとき、室内なら氷は溶けないなどと言うこともできない。

私の家の外で成り立つ法則なら、家の内でも成り立つはずだ。したがつて、賃金は競争によつて決まるというのは、自然の法則ではない。ましてや国家の法でもないから、国に数万ポンドの損失をもたらすような話を、大声で議論するのとはしたくない。

一般の経済学者がそれを法則と思ひ込んだのは、頭脳が足りないせいであつた。じつは、それはたんに過去二十年間、多数のきわめて無教養な連中が賃金をそのようなやり方で決めよう

と企ててきただけのことなのだ。そして、ある程度、そういうやり方でたまたま成功してきたにすぎない。

このように近代の政治経済学は、富の要素の定義にかんしても、また富の配分をつかさどる法則の説明にかんしても、絶対的に無能であったし、絶対的にまちがって来た。

本書で私が展開する論考は、科学のかわりに感情を経済学にもちこもうとしていると、かつて雑誌に掲載したときから一本調子のつまらない非難を浴びてきたが、けっしてそういうものではない。

本書は逆に、無礼にも科学を名乗っているものの正体を暴露する。本書は、政治経済学が扱わざるをえない物質的な素材と政治経済学が柱とする道徳的な諸要素について、これまで疑われもしなかった定義を、あえて大胆に疑わしいものとして明らかにする。

政治経済学は、それ自体は科学でなく、「さまざまの科学に基礎づけられながら、一定の道徳・文化の条件のもとでのみ可能な処世の術」にすぎない。

つまり、経済の三要素である勤勉・儉約・思慮分別は、道徳的な資質であり、道徳的な訓練がなければ獲得しえないものである。この言葉は、読者のみなさんには、あたりまえすぎてつまらない言葉だと思われるかもしれない。いや、それどころじゃない。ヨーロッパの住民たちはこぞってむきになって、このあたりまえの道理を大声で否定しようとしている。

現代のヨーロッパ人は、勤勉さではなく取引の術で富は得られるものと考えている。そして、手に入れた富を使っているうちに、儉約の概念さえ失ってしまった——もちろん、儉約の習慣などはそれ以前になくなっている。さらに、富の使い道の選択において必要な思慮分別については、そもそもそんな能力を持ちあわせなかったためしがないので、それを失ったりするはずもない。

ひとびとが思慮分別を持たないと、きわめて危険なことがいくつもある。政治経済学という二七科学の先生たちでも、その問題について短くていいから何らかの結論をはっきりと述べておくべきであった。もしそうしていたら、結論のじつさいの効果のほどが目撃できて、何が正しく、何がまちがいのなのか、この先生たちにもすぐにわかっただろう。

しかし、経済の主要な大問題のいずれかについて、一本筋のとおりた原理を示してみせた政治経済学者は、これまでひとりとしていなかった。どこの国にもある重要な問題として、私はここでつぎの三つを例に挙げたい。

すなわち、国民の服飾、国民の借地代、そして国民の借金である。

一方、政治経済学の方面で、その諸原理を体系的かつ包括的に述べているものを、くまなく探して見つけねばならないとしたら、それはケンブリッジ大学の経済学教授から得られるにちがいない。

有名なヘンリー・フォーセット教授の『政治経済学要綱』最新版「一八六九年版」を見てみよう。われわれはまず、つぎの三つの問いをしっかりと立てて、それがどう答えられているか、見ていきたい。

I 豪華な服装や家具の生産に資本を費やすことは、国民を豊かにするか、それとも貧しくするか。

II 国民がその土地、あるいはその土地の生産物への租税を、ある定まった数の私人に支払い、そしてそうした私人が自分たちの娯楽のためにそのお金を消費することは、国民を豊かにするか、それとも貧しくするか。

III 国民が私人から借りたお金の利子をいつまでも支払い続けることは、国民を豊かにするか、それとも貧しくするか。

以上の三つは、いずれもまったくシンプルでありながら、何にもまして重要な問いなのであ

1
る。これを解決すれば、その他の特殊な重要問題のすべてについても、国民としてとるべきふるまい方の基本がたちまちわかるだろう。これを未解決のままにしておけば、悪人たちのずる賢さと大多数の民衆の愚鈍さによって、民衆全体がこうむる苦しみは際限ないものになるだろう。

5 以下、私はこの三つの問題をひとつずつ取りあげる。

(I) 服飾

10 金持ちが服装や家具で贅沢をするのは貧乏人に利益をもたらす、という考えが、今日では広く一般民衆の心に染みこんでいる。政治経済学者は、盲目の学者であるフォーセット教授よりもものがよく見えない者でさえ、これを主張するのであればグダグダと言葉を重ねずに済むだろう。とはいえ、彼らがこれと反対のことを主張できる場がどこにあるだろうか。

15 フランスでナポレオン三世が統治していた期間中（一八五二―一八七〇年）ずっと、国家財政の第一原則とされたのは、地方の労働者から地代として受けとったお金の大部分を、パリの婦人服づくりの工場に投入することであった。フランスであれ、あるいはイギリスであれ、このシステムへの反対を自らの科学の結論として主張した政治経済学者は、どこにいるだろうか。

一般の考え方がまちがっていることについて、私はすでに一八五七年、その本質を明らかにして、その危険性を大いに訴えたものだ（※原注）。

（※原注）『芸術の経済学』（一八五七年、六五―七六頁）「宇井丑之助・邦夫訳『芸術経済論』、巖松堂出版、

一九九八年、●●～●●頁」

20 25 30 35 40 45 50 55 60 65 70 75 80 85 90 95
しかし、軽薄な一般大衆がうなずきそうなことを発言してきた連中は誰ひとり、私みたいに実業界の大物たちを攻撃するような発言などはしなかった。だからこそ、あれから十四年間、パリの実業界の大物たちはやりたい放題のことをしてきた——それが今日のこのありさまにながっている。フランスの現状については、教育相ジュール・シモンがずばりと鋭く、こう語っている。

「われわれは名誉のかわりにお金、勤労のかわりに投機、信頼と尊敬のかわりに不信を置き換えた。不道徳を許し、あるいはむしる賛美する。ふしだらな女をもてはやす。贅沢品を眺めて楽しみ、下品な話を聞いて楽しむ。公然とした泥棒行為の手助けをし、あるいはそれに拍手を送る。道徳をあざわらい、成功した者が勝ちだと思う。快楽のみを愛し、力のみを崇拜する。まじめに努力するより妄想にふける。考えないでしゃべる。面目を保つことよりも騒がれることを好む。冷笑的なのが大人の態度とされ、面従腹背が制度化されている。——これが、われわれが目当たりしてきた現実の光景なのか。これが、われわれ自身でつくってきた社会なのか」（※原注）

（※原注）ジュール・シモン教育相がフランスで行った演説より抜粋。イギリスの新聞「ベル・メル・ガゼット」一八七二年十月二十七日号に掲載された。

30 35 40 45 50 55 60 65 70 75 80 85 90 95
もちろん、こうした現実を生んだ背景には、豪華な服装や家具を求める欲望以外にも、かずの原因があった。とはいえ、やはり一番の原因はその方面への欲望だったのである。この欲望は、聖職者からも非難されず、さらにはたいいていの場合、経済学者たちから商業に有益なものとして励まされてきた。

この現象は、フランスだけの話ではないと考えたい。イギリスもまた、急速に同じ道をたどろうとしているからだ。フランスとは、かつて何度も戦争をしたが、お互いに似たようなものが流行するし、貿易も自由におこなわれているので、けっしてそれほど宿命的に敵同士だったわけではない。

いや、私の知るかぎり、このイギリスで数週間前におきた事件ほど、不気味で不吉な前兆を示すものはない。アッシリア風、あるいはローマ風の贅沢がもたらした事件である。イギリス北部の静かな町の、ちゃんとした裕福な家庭の一人娘が帽子を買いたった。その帽子屋がお

こした訴訟のために、娘の両親は高齢にもかかわらず路頭に迷うことになってしまった。

(II) 地代

地代の本質については、フォーセット教授が『政治経済学要綱』最新版の一二二頁で、つぎのようにきわめて正確な説明をおこなっている。

「国の領土は、おそらくいずれも征服によって得られたものである。そして、ふつう、征服者の首領が、手柄を立てた手下たちにその土地をほうびとして分け与えた。……力によって獲得された土地は、力によって守らねばならなかった。法律の優位性が確立して、財産の安全が保証されるようになるまで、どの貴族もお抱えの者たちによる守りが万全でないかぎり、自分の土地を所有し続けることはできなかった……（※原注）。やがて、財産の安全が保証されるようになり、地主は自分たちの所有権をすべて国家が力づくで守ってくれると思うようになった。ところが、そうなるにつれて、こうした封建的な土地所有の痕跡はすっかり消えてなくなり、地主と借地人の関係は純粹に商業的な関係となる。地主は、自分の土地を借りたいと望む人になら誰にでも貸す。地主の関心は、できるだけ高い地代を獲得することだけである。このようなとき、地代はどのような原理によって規制されるのであろうか」

（※原注）ここで略した部分はただ前の説明の敷衍。けっして別趣旨のことが語られているわけではない。

フォーセット教授は、これらの諸原理の探求を、本人としては抜かりなく推し進めていく。まさか、その全体をおおしての第一原理が問題にされるかもしれないとは、一瞬たりとも考えていない。すなわち、土地の所有は力によって獲得されたものであり、力によって維持されているものだという、まさにその点を誰かが問題にするとは思ってもしなかったようである。

ところが、その点の解明こそが今日の喫緊の課題なのだ。すなわち、そもそも盗みで得たものが盗み返しにあうのは当然といえないか。あるいは、その後の盗み返しだけが本当の盗みだといえるのか。さらにいえば、最初の盗みとその後の盗み返しのほか、土地の所有を成り立たせる条件などがあるのか。これを明らかにしなければならない。

(III) 借金

昔、私がまだ子どもだったころ、父はときどきロンドンの商人たちを家に招いた。みな善良で健全な実業人ばかりで、彼らが食卓を囲んでかわす会話を、私も同席して黙って聞いていたものだ。

私が一番驚いたのは、そういう穏健できわめて慎重な人たちでも、数人はつぎのような信念を平然と口にしたことである。つまり、「国が借金するということがなければ、国民は自分の金をどうしたらいいか、あるいは、どこに自分の金を安全にしまっておけるのか、わからないだろう」というのだ。

フォーセット教授の『政治経済学要綱』三九九頁にあるつぎの文章も、これとまったく同じ意味である。

すなわち、「わが国においては、損失のリスクにたいする安全保障は公的基金によって提供される」

教授はこう述べて、地代のときと同様、ふたたび平然と話を進めている。政府が、五十年前の花火代の借金の利子を払うのと、今日の生産的な労働のための借金の利子を払うのとでは、国の繁栄におよぼす効果は本質的に異なるはずなのだが、教授はそのことに一瞬たりとも頓着する姿勢を見せない。

こうした借金の本質的な相異については、本書の第五章「政府」の第一二七節―一二九節で詳しく論じたい。しかし、本来なら経済学者が、政府にかんするその他の問題に取り組みまえに、まずこの問題を十分に説明すべきなのである。それなのに、私が本書の第五章でおこなう

1 説明だけが、今日までになされた唯一の、決定的な説明となるだろう。

5 こうした説明がまったく欠如していると、それが現実にもたらす結果はこうだ。

10 資本家は、自分たちのお金の正しい使い方を知らないで、さまざまの国の農民にむかって、君たち農民はお互いに殺しあうために鉄砲が必要なのだとそそのかす。農民たちは、そのかされるまま鉄砲の製造工場から鉄砲を借り出す。資本家は、その製造工場から歩合を受けとり、科学者は兵器製造を大いに楽しむとともに、信用を得る。

15 農民たちは飽きが来るまで互いに一定の人数を殺しあう。各地で互いに家を焼き打ちする。それがすむと、鉄砲に飾り模様をいれて、塔や兵器庫などに納める。(さらに、勝ち組はポロポロになった旗を教会に納めたりもする)。

20 そして一方、資本家たちは、農民の勝ち組にも負け組にも、鉄砲と火薬のローンの利子を以後も毎年ずつと支払うよう強要する。

25 こういうやり方を資本家は、「自分の金をどうしたらいいか、わかっている」とこと称するのである。そして、商業界のひとびとはそろってこれを「実用的な」政治経済学と呼び、「センチメンタルな」政治経済学とは正反対のものだというのだ。

30 いまから十一年前、一八六〇年の夏だった。私はそのとき、ようやくはっきりと問題に気づいた。(すでにカーライルはずつと以前から気づいていたのだが)、政治経済学の先生たちのこうしたかすかすの誤りのせいで、ヨーロッパの人民大衆はたいへんな苦難に会おうとしている。

35 そこで私は文芸誌『コーンヒル・マガジン』に一連の論文を発表し、自分なりにそうした誤りとの闘いを始めた。それらの論文は、後に『この最後の者にも』という書名で本にまとめられた。

40 このマガジンの編集者「ウィリアム・サッカレー」は私の友人で、論文を連載できたのも彼のおかげだ。しかし、連載が三回続くと、読者からの非難の声はどんな剛胆な編集者でも耐えられないほど激しくなった。編集者は、彼としてもまことに遺憾ながら、という詫びの言葉を添えて、連載の経済論はあと一回しか続けられない、と告げる手紙を私にくれた。

45 最後の論文ならと、私は彼の許しを得て、ほかよりも長いものを書かせてもらい、そして齒に衣着せない率直な結論を提示した——それはいまも書物として読んでいただける。

50 私にとってこの連載論文はかなりの労作だった。しかも、私がそれまでに書いたものより相当できがよく、私の過去の論文全体をあわせたよりもっと重要な真理をいくつも含んでいる。それを承知しているだけに、私はマガジンの読者たちから激しく非難されたことで、なおさら深刻に考え込んでしまった。

55 私は二年以上、ああでもない、こうでもない、この問題を頭のなかでこねまわしたあげく、ついに決心した。政治経済学を徹底研究した論文を書くことを、残りの人生の中心課題にしようとしたのである。

60 それでも、そのときすぐに実行に移ったわけではない。きつかけは別の文芸誌『フレイザーズ・マガジン』の編集者「ジェームズ・アンソニー・フルード」からの手紙であった。手紙によれば、私の経済論にはなかなか鋭いものがあり、危険なテーマでも私が選んだものなら、その論文をこの雑誌に載せられるよう努力したい、というのである。

65 それを読んで、私は一八六二年から六三年にまたがる冬、書いたものを少しずつ彼に送った。構想中の著作の序文にあたるものを、あえて控え目に四章にわけて送った。編集者はそれを掲載してくれたのだが、発行者の激怒にあつてそれ以上の発行は妨げられた。『フレイザーズ・マガジン』の読者は、『コーンヒル・マガジン』の読者と同様に、4回しか私の論文を読めず、もうそれ以上私のせいで心が騒ぐこともなくて済んだ。

その後、私も体の具合が悪くなったり、家族が亡くなったり、いろいろな不都合なできごとがあり、著作の本文執筆に移ることができなかった。——こうして無為のまま七年が過ぎた。いま私はやむなく、包括的な経済論の序文として書いたものだけで一冊の本にする。そして、包括的な経済論のためにとっておいた書名をこの本の書名とする。

私はべつに不満でもない。この年齢になると、挫折感など覚えなくなるし、また、序文といえども経済の諸概念を定義したものととして、それだけで立派な本になるからである。

じっさい、いま書いている途中の『イギリスの労働者たちへの手紙』も、これらの定義をベースにしている。また、この『手紙』は、もつと打ち解けた調子の文章によって、本書『ムネラ・プルウエリス』の基本目的を果たしてくれるだろう。

基本の目的とは、すなわち、本書の第一章の第二十七〜二十八節でじっさいに要約されているとおり、富の分配の法則が道徳におよぼす影響と、その法則の修正が可能かどうかを検討することである。富の分配の法則はひとつのあいだで議論されることもなく、これまで広く常識とされてきた。

ふつうの経済学者はこの法則を神聖不可侵のものとみなすし、逆に、ふつうの社会主義者はこの法則がまもなく全面廃棄されると思っている。しかし、じつは両方とも考え違いなのだ。

富の所有をいまの社会に整合させている法則は、人の道に反するものである。なぜなら、富の所有を人に追求させる動機は不純なものだからである。しかし、社会主義のほうも、人の心から貪欲さや名譽心をなくしてしまわないかぎり、この法則の廃棄を実現することはできない。そして、いかなる社会主義も、まだまったくその方向へは足を踏み出していない。

変革というのは、いずれにせよ、人の期待どおりには進められない。たしかに、度が過ぎる贅沢は禁止できるかもしれないし、極貧の苦しみは軽減できるかもしれない。しかし、自然の働きというのがある。社会主義が最大限の努力を払っても、この自然の働きは進行を妨げることができない。すなわち、まじめな節約家は放蕩にふける人間よりもかならず裕福になる。頭の良い人間は頭の悪い人間よりも楽な暮らしができる。

とはいえ、ここが大事な点だが、勤労の産物をその人の所有物として配分するさいに考量されるのは、その産物の量ではなく質である。したがってまた、配分はその人の勤労の目標設定がどれだけ賢明であつたかに依存する。

本当の豊かさを求める国民は、穏やかに豊かさを追求する。それゆえに、富の分配は思いやりの心でなされ、富を手にするには本当の喜びに満ちる。一方、偽りの豊かさを求める国民は、不穏当に豊かさを追求する。それゆえに、富を正しく消費することもできず、富を心静かに楽しむこともできない。

本当の豊かさとは偽りの豊かさについて本書で示す定義は、いま私が取り組んでいる論考においてもそのベースにしたいので、元ものを念入りに修正したうえで再提出したものである。

本書は外国で執筆した。一部はミラノで、一部は冬のあいだジュネーブに近いサレーブ山の南東斜面の別荘で書いた。そして、手書きの原稿をできるだけ読みやすい形に仕上げ、ロンドンに送った。

そのときは校正できなかったもので、いまになって文章のあちこちを修正せざるをえず、あるいは、ほんの小さな修正で済まずしかない。修正によって文章の意味が変わったばあいには、その部分を【】で囲んだ。また、注記を加えることが必要と思われた場合にも、同様に【】で示した。

これは自分でも認めるが、私は言葉にたいする妙な嗜癖があり、その弊害がでている部分は多すぎて、とても注釈しきれない。この嗜癖にはまったのは、あの冬、ボンヌビルやアナシーの山に向かって、幾度となく一人歩きをし、あれこれのフレーズを長く考え込みすぎたため

ある。

しかし、私はけつしてこの本を、参照用の辞書以外のものにする意図などもたなかった。そして、私はこの本をちゃんと読んでくれる人のために、この本を書いた。だから、読者のみなさんがこの本の中にみなさんが求めるものを見出されるならば、私の癖である無愛想な言い回しをも許してくださるだろう。私はそれを期待する。

本書の論考は、すでに述べたように雑誌掲載のとき、その数は四編であった。それを本書では、もっと読みやすいように、全体を六章にわけた。そして、（これは自選の著作集の全体の方針にするつもりであるが）、節に番号をつけた。

この自選の著作集の第一巻『胡麻と百合』は、私が大きな苦難のなかにあつたときに私を助けてくれた友人「レディ・マウント・テンブル」に捧げた。第二巻である本書は、これまで私の主なしごとすべてについて、それを励まし実現させた私の友人にして指導者である**トーマス・カーライル**に捧げたい。

彼こそ、文芸家のお歴々のうちでただひとり、この時代、この国のひとびとに聞く耳があれば、ぜひとも聞くべきことから知っており、そしてそのことがらを私心なく書きつづってきた人である。彼にたいする私の尊敬の念がどれほど強いものか、それをもっと上手に表現する力が私にあれば、と思われてならない。

聞くべきことがらを私心なく語った人だからこそ、彼がしごとを終えざるをえない晩節に近づいたいま、共和主義と自由思想がはびこるイギリスという国はいだちもあらわに彼を攻撃するのだ。イギリスは腑抜けな政治と誇りなき商業という深淵から、三文文士たちを束ねて彼の悪口を叫ばせ、それを聞いて喜んでゐる。しかし、ひとりぼっちでこの国にたいし、勇敢な国となつて人類を救うべしと訴え、正義の国となつて神を愛すべしと訴えた教師こそ、まさにこの人であつた。

デンマークヒルにて

一八七一年十一月二十五日